

命について考える

(原文)

永田 さな (10 歳)

鹿児島県

鹿児島市立春山小学校

命は全ての動物や植物に一つだけ与えられたものであり、いつかは亡くなる、限りあるものです。自分は明日死ぬかもしれない。次の日楽しいことが待っていても、前日に死んでしまうかもしれない。そう考えると、悲しくなります。それは、自分の周りにいる大好きな家族や友達とはなれないといけなからです。たった一つの命を一度失ったらもう生き返られません。そのように想像すると怖くなります。人が生きているのは、当たり前ではなくいくつもの奇跡が重なった結果なのです。

私が命について考えるきっかけとなった体験は、ペットの死です。3年前まで私の家では「ゆず」という名の小さなチワワを飼っていました。私が生まれる前から家族の一員であり、私が生まれてからもずっとそばにいる存在でした。人見知りだけど大きな目とふさふさした黒色の長い毛並みで、近所の人にもかわいがられました。ゆずとの別れは突然やってきました。ある暑い夏の朝、ゆずは私の目の前で、「ドン」とたおれたのです。一瞬の出来事でした。私は急いでかけよってゆずを抱きしめました。

「ゆず、死なないで。」母と懸命に声をかけましたが、ゆずの呼吸は次第に弱くゆっくりとなり、やがて止まってしまいました。私は腕の中で命が消えていくのを見守ることしかできず、体中の水分がなくなってしまうのではないかと思うほど泣きました。もっと遊んであげればよかったとすごく後悔しました。ゆずはわずか2キログラムの小さな犬でしたが、私たち家族にとっては大きな存在だったことを亡くなって3年経った今でも感じています。ゆずは身をもって、限りある命を後悔しないように生きる大切さを教えてくれたのだと感じます。

今、世の中は新型コロナウイルスの世界的な流行により、1日何万人もの人々が亡くなっていることが報道されています。その流行から一年以上が経って、亡くなった人の数を数字で見ることに慣れて来てはいないか、私はとても心配です。亡くなった一人ひとりにそれぞれの人生があって、大切に思っている家族や友達がいるはずで、誰一人コロナウイルスで命を失いたくはなかったにちがいません。「今日は死者の数が昨日より少なかったからよかった」と簡単に片づけてほしくないと思います。今回のウイルスの流行によって、死は思ったよりも身近にあるということを実感しています。そのような今を生きる私たちは、生活にいろいろな制限があることを不満に思うのではなく、大変なこの時期も懸命に治療にあたっている医療従事者などへの感謝の気持ちを忘れずに、今こそ思いやりの気持ちで人と接して、今できることに精一杯取り組まなくてはならないと思います。

ある日の道徳で、担任の先生が、小学 2 年生の時に当時 33 歳だったお父さんを失くした話をして下さいました。小さい時にお父さんを失った先生の悲しさや、若くして子どもを残して亡くなったお父さんの辛い気持ちを考えると、胸がしめつけられる思いがしました。先生は、「お父さんの分まで二人分の人生を生きています。」とおっしゃいました。先生が伝えたかった言葉の意味や重みをかみしめながら、私も日頃からそのような気持ちで一日一日を大切にしないといけないと思いました。また、家族やクラスのみならず一人一人がかけがえのない存在なので、自分と同じように大切に、そして優しく接したいです。

私の将来の夢は助産師になることです。命の誕生に立ち会う大切な仕事であり、人の生死と向き合う機会も多いことが考えられます。そのために、人に寄り添える優しさと強さを持てるよう、日々努力し続けたいです。